



おじいちゃん
おばあちゃん

体験した

大切な大切な
お話の数々



2006 親子で学ぶ平和学習資料

第28集

私の戦争体験

一兵士の記憶

松原市 濱口 勇 (85歳)

昭和16年、20歳の私は港区で船舶関係の仕事に就いていた。近所に赤紙(※①)が来るようになり、私も召集が来たら行くものだと思っていた。長男である私が召集されると先祖を守る人がいない事に周りが心配し、知人の紹介で5月結婚、7月に赤紙が届き、8月、中部68部隊入隊、篠山(※②)へ。

20名の新兵は交替で飯炊き、片付け、衣類の整頓などをする。部隊には虫入りの古米と麦しかなく、半々に炊き、米の部分は古年兵と班長、新兵は麦と虫の混じった残りを食べる。衣類の整理は厚紙を間に挟み、シワ、ズレなどないよう整えておく。一つでもたたみ方が悪いと全体責任と叩かれ、体罰の繰り返しである。

当番のない日は13貫(※③)の兵器を体に付け演習が続く。11月に入ると雪が降り出す。支給された明治時代の赤毛布は毛が抜け落ちて暖かなくなり、暖房のない兵舎は風が吹き込み寒い。苦しさ辛さから逃げ出す兵もあり、深夜、非常ラップとともに古年兵は山を、他は町や駅を手分けして探したこともあった。その後逃亡兵が捕まりどうなったかはわからない。12月、新兵器130発銃と夏服が支給され、南方への野戦(※④)出征(※⑤)がわかる。2泊3日の外泊許可が出るが、どこへ行かされるのか、生きて帰れるか、わからないまま、家族との別れをする。

2月1日出征。途中、大阪駅地下室で4時間の待機がある。「近くにスパイが居る」ために外出許可されず、見つからぬよう丸めた伝言を通行人に頼み、家族と逢うことが出来る。軍用列車(※⑥)で宇品港(※⑦)に着く。逃げ出せぬよう周りを憲兵(※⑧)に囲まれてる。

覚悟して輸送船に乗る。船底には馬、二段目より畳一枚に2名ずつが横になる。数千人

※①赤紙
軍隊からの召集令状。赤い色の紙に印刷されていたのでこう呼ばれた。

※②篠山
兵庫県東部、篠山盆地にある町。

※③13貫

尺貫法の目方の基本単位。1貫は3・75
詰。13貫は約49詰。

※④野戦

「野戦」は戦場。

※⑤出征

「出征」は軍隊の一員として戦場に行くこと。

※⑥軍用列車

軍の兵士や装備を輸送するために編成された列車。

※⑦宇品港

広島県西部の港。1932(昭和7)年に
広島港と改称。太平洋戦争終了まで陸軍
の輸送基地だった。

※⑧憲兵

軍事警察。大日本帝国陸軍では陸軍大臣
に属し、陸・海軍の軍事警察、軍隊に
関する行政警察・司法警察をもつかさど
った。のち次第に権限を拡大して思想弾
圧など国民生活全体をも監視するよう
になった。

注1

兵士が逃げ出さない為のようです。本
当にスパイがいたかどうかは不明です。

が10隻ほどの船団となり、途中まで護衛艦に守られ出發する。船内は蒸し風呂状態だ。身に付けた千人針(※⑨)にも3日ほどで虱(※⑩)がわき体がかゆくなるが、それでも丸めて身に付ける。夜中、汽笛が3発鳴る。3隻が撃沈されたとわかり、一段と緊張する。台湾上陸後、スコールで体を洗い、虱を取り出航命令を待つ。

スマトラ(※⑪)、ブキチンギ(※⑫)駐屯。6名ずつ交替で山へ登り警備につく。スパイを見つけ暗号を送る。夜は特に緊張が増す。やがてマラリア(※⑬)にかかり輸送船任務にかわる。敵に見つからぬよう日中は島陰に隠れ、夜間と台風の時に船出し、港ごとに物を届ける。

内地の様子はまったく知らされないまま4年経ち、派遣隊から終戦命令が来て初めて日本が負けたと知る。皆元氣なく、菊の紋(※⑭)のに入った兵器を鑊(けず)り削って海に沈める。それには胸がつまった。その後捕虜となり、鉄条網に囲まれた建物に入る。仕事は毎日監視の中、穴の修復が10ヶ月ほど続いた後、内地へ帰る命令があり港へ向かう。甲板でスコールを浴び、眠り、半月くらいで名古屋港が見えたとき、皆で「バンザイ」をする。

アメリカ兵の荷物検査を受け、白い粉(※⑮)をかけられ、5年ぶりに日本の地を踏む。靴下一足分の米と300円(※⑯)くらいの金を受け取り大阪へ。空襲で我が家はなくなっていたが、出征後に生まれた息子と妻が実家に疎開(※⑰)し、元氣でいることを知る。5日後の再会。息子は4歳になっていた。そして次の日から、食べるための生活が始まった。

私の戦争体験

泉北郡忠岡町 今村 喜代子 (81歳)

昭和16年12月8日未明、日本軍は宣戦布告(※①)なく真珠湾を襲撃。以来、20年8月15日の敗戦まで、今81歳の私の青春はまさに軍国乙女(※②)で、空襲の恐怖と空腹の毎

※⑨千人針

一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、武運と無事を祈って兵士に贈ったもの。

※⑩虱

哺乳類の皮膚に寄生し、血液を吸う。

※⑪スマトラ

当時はオランダ領のスマトラ島(現在インドネシア)。石油を豊富に産出することから、旧日本軍の早期侵略の的になっていた。

※⑫ブキチンギ

スマトラ島にある高原の町。

※⑬マラリア

ハマダラカの媒体するマラリア原虫の血球内寄生による伝染病。

※⑭菊の紋

皇室の紋章。

※⑮白い粉

身体や衣類に付着したノミやシラミなどの害虫を駆除する薬品。DDT。

※⑯300円

当時の平均的な月収は50〜60円。

※⑰疎開

空襲、火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること。

※①宣戦布告

他国に対し戦争という手段を行使することを宣言・公布すること。

※②軍国乙女

軍国主義の教育、社会体制にがんじがらめにしばられた娘。

日でした。

はじめは勝利続きだったが、物資ともに日本とは比較にならない大国との戦いに次第に戦局は悪化、サイパン島が玉碎(※③)全滅。その後米軍は沖縄へ上陸、昭和19年後半から20年にかけて、国内への空襲が昼夜を問わず日増しに激しくなりました。3月の東京、大阪大空襲をはじめ、広島、長崎に原爆(※④)投下、空襲は衛星都市にもおよびました。当時私は、堺中学(現・三国丘高校)の近くに住んでいましたが、堺には7月10日の深夜から未明にかけて2時間近く、B29爆撃機(※⑤)ー6機が焼夷弾(※⑥)を雨霰のごとく投下しました。当夜は警報発令後、敵機が大編隊で堺の上空を通過、和歌山を襲撃、南の空が真赤に染まり、時々ファツ、ファツと燃え上がる様子が堺からも見え、やがて警報も解除になり、やれやれと寝かけたところへ突然ゴォー、ザァーの轟音に飛び出すと、堺東あたりから西はもう火の海。

まさに虚を突かれたようで、防空壕(※⑦)へ入ったものの、ここも危険と東へ走り畑の中へ座り込んだところへ「もうあかん、丸焼けや」と、被災者がごんごん避難してきます。真っ暗闇の空中に、先に照明弾(※⑧)が一発投下されると、あたり一面は真昼のようになり、そのあとへ焼夷弾を雨霰のごとく投下。一発の焼夷弾が途中で何十発にも分かれ、猛スピードで民家の屋根を突き破り、跳ね返ります。その様子をただただ恐怖に震えながら眺めるばかり。一夜明けると、我が家は助かったものの、堺中学に負傷者や死者が運ばれてきて野戦病院(※⑨)のようで、今でも夏に打ち上げ花火を見ると、「きれい」と思う前に空襲を思い出します。

女学校時代も、大阪城の軍隊や神社に勤労奉仕(※⑩)に出かけ、卒業後、大阪淀屋橋の日本銀行に勤務、昼間、空襲警報が出ると金庫館の地下室に避難。向かいの大阪市役所から天皇・皇后の御真影(※⑪)が運ばれ(当時は日本中の学校、官公庁に安置され、絶対死守せねばならず)、避難中も時々、ゴォードスンドスンと、爆弾、焼夷弾が投下されるたびに地響きがする有様。やがて解除されて外に出ると、梅田あたりから北方面は一面の炎と黒煙に「もしや私の家も?」と泣き出す人もあり、上司に叱咤され、翌日には半焼

※③玉碎

玉が美しく碎けるように、名誉や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと。旧日本軍では、戦闘に負けると判断すると、敵に突撃して倒されるか自決(自殺)を選ぶかしかなかった。

※④原爆

ウラン、プルトニウムなどに核分裂反応を爆発的に行わせた時に発生する熱線・衝撃波・各種放射能で殺傷、破壊する爆弾。広島では、子どもたちは校庭に並んだまま、通勤者は電車に乗ったまま、主婦たちは家事をしているままの姿で殺戮された。長崎では、軍需工場に狩り出された生徒たちや多くの市民が倒壊した建物の下敷きとなって圧死し、または生きながら焼き殺された。

※⑤B29爆撃機

長距離爆撃用に開発された米軍の大型爆撃機。無差別じゅうたん爆撃で日本の多くの都市を焼け野原にし、広島と長崎には原爆を投下した。

※⑥焼夷弾

火災や高熱によって人や建造物などを殺傷・破壊する爆弾・砲弾。

※⑦防空壕

空襲の際に避難するため、掘って作った穴や建造物。

※⑧照明弾

暗闇を照らし出し、目標物を明確にするための爆弾や砲弾。

※⑨野戦病院

戦場の後方に設け、戦線の傷病兵を収容・治療する病院。

※⑩勤労奉仕

無償で労働することで国家に貢献すること。

※⑪御真影

高貴な人の肖像画・写真などを敬つていう言葉。

けや血のついたお札の両替に訪れる人が多く、てんてこ舞いでした。

電車も多く焼かれ、窓ガラスは破れ、板張りの窓からも乗降、シートの上に土足のまま立ち、地下鉄も帰りは中之島公会堂あたりから並び、難波まで御堂筋を歩いたこともたびたびありました。

食料も配給が滞り、栄養失調で生理も半年間止まり、お風呂にも入れず頭に虱もわきました。

今も、イラクなどでもそうですが、戦争では一番弱いものが多く犠牲になり、靖国神社には国民の知らぬ間にA級戦犯(※12)が合祀(※13)されています。国民をばかにした戦争は絶対してはならず、世界に誇る憲法九条(※14)は子孫のためにも何としても守りぬかねばと思います。

孫たちに伝えたい「黄色いターバン」

堺市 久保田 英世(68歳)

おじいちゃんからみると萌と陸と大は孫にあたります。おじいちゃんが萌ぐらいの年の時起きたできごとを萌にお話しします。

おじいちゃんが六歳の時、日本はアメリカとせんそうをしました。

せんそうとは、てっぽうやバクダンで人をころすことです。たくさんの人をころした国がせんそうにかつのです。日本人やアメリカ人は、せんそうによってたくさんにました。せんそうは、ほんとうにおそろしいことです。せんそうはほんとうによくないことです。人ごろしごっこはほんとうにこわいことです。

おじいちゃんは中国という国でうまれました。毎日、毎日、こんなおそろしいせんそうの中で、ようちえんにかよっていました。あるあついなつの夜、大きなひびきでウーウーとサイレンがなりました。おじいちゃんはすぐおとうさんにおこされました。「ア

※12 A級戦犯

戦争を準備、推進、指導した重要な戦争犯罪人。

※13 合祀

二柱以上の神・霊を一社に合わせ祀ること。

※14 憲法九条

第二章 戦争の放棄
第九条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
2 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

アメリカのひこうきがバクダンをつんで来て落すのだ。早くぼうくうごうににげる」といつて、みんなかぞくは一階のかいだんの下にあるぼうくうごうにげこみました。すぐドーンという大きなおとがしてまどガラスがぜんぶわれてとびました。アメリカのひこうきがバクダンをおとしたのです。ぼうくうごうの中はあつくて、あつくてたまりません。でもバクダンがこわくてがまんしました。

朝になって、夜のバクダンのことはわすれていました。夕方、おとうさんがかいしゃからかえってきて、夜のバクダンはおとうさんのかいしゃの、しゅえいさんの部屋におちたとききました。

しゅえいさんはインド人です。あたまに黄色いきれいなターバンをつけていました。そのしゅえいさんの子供とおじいちゃんともだちだったのです。インド人のおとうさんは、アメリカのバクダンでしんでしまいました。インド人のおとうさんは日本とアメリカのせんそうにまきこまれて、いのちをおとしたのです。インド人のおとうさんは、かんけないのせんそうでしにました。

おじいちゃんのもだちのインド人の子供はほんとうにかわいそうにおもいました。インド人のおとうさんは、くろいひげをはやしてやさしい目をしていました。おじいちゃんの手をにぎってあくしゅをしてくれました。ごつごつした大きな手でした。今でもときどきゆめの中でわらっているかおがうかびます。せんそうのない、あんしんして生きていける日本がながくつづきますように心からおいのりします。

私の知る限りを…

熊本県人吉市 井上 瑞江 (79歳)

八月の空は真夏の青空。その日は入道雲もないきれいなきれいな空でした。

小学校（当時は国民学校）で垂水（鹿児島県）の海岸に塩田小屋を建て子どもたちと先

生とて海水を運び火を焚き塩を作っていました。焚火でほてった体を風に吹かれようと小屋を出て、「今日の空はきれいなね」と一緒に出了た先生に声をかけ、見上げた途端、キラキラと光るなど思った一瞬、ダツダツダツと機銃掃射(※①)。近くのタコ壺(※②)に飛び込みました。砂浜なので覆いはないのです。一つの穴に二人飛び込み、思わず南無阿彌陀佛を唱えました。穴のすぐ横を銃弾の穴が列を作っていました。二人で無事を確かめあい、街の人々と城山の防空壕に駆け込みました。壕の中では、皆声もなく、次々と燃え上がる我が家を見ようと壕の入口に出るとたちまち低空に降りてくる敵機の機銃掃射。壕の中まで押し倒されそうな爆風です。

何度も旋回をした敵機もやっと遠のき静かになった時、「先生、葉を付けて下さい」と三年生くらいの男子生徒の声。ハッと振り返ると顔に火傷です。足りないかと判っていました。痛々しい姿は忘れられません。その後を知るすべもなく、わずか数時間の悪夢でした。

熊本県の人吉にある実家に帰った時は、空のバケツに下駄履きでたどりつきました。人吉は山々に囲まれた盆地。別世界のように静かでした。戦災に遭ったのが八月十日、五日後に終戦。終戦を報じるラジオも銃撃のショックで耳が聞こえなくなっていました。

平和が訪れ幾年か経ち母校で卒業式のやり直しがあり、なごやかに式を済ませ、その後で校庭の一隅にある殉国(※③)の碑に手を合わせました。一級後輩の人たちの碑です。学徒動員(※④)の工場が直撃を受け、誰彼の区別などつくはずもなく飛び散った肉片に付いていた名札やモンペ(※⑤)の柄で、女学生の受難が判ったとのこと。当日欠席して受難を逃れた人が四、五人いて、「自分たちには同級会の開かれることはないのですよ」と寂しい話。聞く私どもも切なく胸が痛みます。

今の私どもは平和ぼけになっていっているのではないでしょう。土曜、日曜とお休みがあつて。当時は『月月火水木金金』(※⑥)と声を張り上げ歌っていました。毎日、朝夕、空襲警報に明け暮れしていた暮らしの記憶も遠くなりましたが、本当に戦争だけはいけません。今でもどこかで争いに巻き込まれている人たちが、子どもたちのあること。悲しいニュー

※①機銃掃射

戦闘機に搭載した機関銃から、目標をなぎ倒すように高角度に発射すること。

※②タコ壺

縦に深く掘った一人用の塹壕。

※③殉国

国のために命を投げ出すこと。

※④学徒動員

1943(昭和18)年、それまで兵役を免除されていた大学・高等学校・専門学校に特攻隊員に狩り出されることになった。特攻隊員になった学生たちは敵に体当たりしたり、前線に向かう途中に船ごと沈められたり、またあるいは病気に倒れたり、その多くが再び母の顔を見ることはなかった。

※⑤モンペ

もともとは東北あたりの農村の仕事着。戦争が始まると日本中の女性の普段着になった。

※⑥月月火水:

標語。戦時体制のもと、軍人・兵士はもとより動員された人々、一般人まで「休みはいりません」とばかりに酷使された象徴。

スを聞くのが切なくてやりきれません。「空襲警報」「敵機来襲」とサイレンや警防団(※⑦)のメガホンの声に、小さな子どもたちは眼を引きつらせ、こわそうな顔で親にしがみついて防空壕に駆け込んだ時代があって、命を護ることに必死だったことを忘れてはならないのです。

命の大事さ、一度しかない人生です。

まだまだ話はたくさんあるのですが、限られた紙面です。充分なお話が出来ませんでした、一人でも二人でも、私の知る限りをつたえねばなりませんね。

戦争の記憶から

堺市 黒田好 (74歳)

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まる。大阪大正区に住み、十歳のとき、空襲もだんだんはげしくなり、自宅の玄関の三畳の間の下に頑丈な防空壕が父の手で造られていた。空襲警報になるとそこに入り、棚に並べてあるお菓子の缶を開けるのがたのしみだった。

昭和二十年三月十三日夜から十四日未明にかけて大阪大空襲があった。すでに三月十日には東京で大空襲(※①)があったが、詳しい報道はなかった。B29爆撃機がゴーゴーと爆音を轟かせて飛来し、油脂焼夷弾を落した。空中で大きな焼夷弾が炸裂し、無数の火の玉となって落下し、物に当たると四方に焼夷弾の油が飛び散って一度に燃え上がった。

はじめは家の壕に入っていたが、ここでは危ないと判断して家の前の神社の境内にある隣組(※②)の壕に移った。しかしそこにも落ち、桧の木で造られた社はよく乾燥していたので瞬く間に火の手が上がり、手の施しようがなかった。

その時私の家族は、父は町内会の会長をしていたのでそばに居ず、兄は大学生で不在。十歳の妹は徳島に学童疎開(※③)。私は、臨月の母と六歳の妹、三歳の弟とともに「こ

※⑦警防団
空襲に備えるため、消防組と防空を担当する防護団とを結合した団体。

※①東京大空襲
1945(昭和20)年に入ると米軍は一般市民への都市爆撃を大々的に開始。100回を超える無差別爆撃で東京市街地は6割を消失、住民の半数近くが家を焼け出された。

※②隣組
太平洋戦争中、国民の監視・統制のために作られた地域組織。町内会・部落会のもとに数軒を単位として作られ、動員、供出、配給などの日常活動を担った。

※③学童疎開
1944(昭和19)年、政府は米軍の空襲

「こも危ない」というので壕を出て、母をかばいながら弟を抱え込み、南の方に逃げる。途中で、妹を見失う。その間にも焼夷弾が次々に落ち火が飛び散る。そのたびに伏せる。そのうち途中の壕に頼んで入れてもらった。その後も爆撃は続く。壕を管理する組長さんが「よその組の方は出て下さい。命の保証ができません」と言われたので、仕方なく出る。そのあと壕で妊婦、子ども三名が亡くなられたそうである。父が探しに来たとき、てっきり母たちだと思っただろう。その後も近くの工場地帯はどんどん燃え上がり、ドラム缶が次々と爆発し、生き地獄だった。空襲は終わったが四方は火の海だった。広場で近所の人に連れられた妹に再会し、助かったことをしみじみ感謝した。

私の家は焼けたものと思っていたが、類焼(※④)寸前、帰ってきた兄や近所の人の協力(りやく)で「あきらめるな」と消火に努めてくれたので何とか助かった。家が焼けるかもしれないというので外に運んだ家具は皆、誰かに持って行かれた。自転車に、疎開するために父の礼服を茶箱(※⑤)に入れ積んでいたが、持ち去られた。父は新しい履物、食器など被災者に提供していた。近所の泉尾女学校は購買部が火災に遭い、屋上や校庭には二メートルから三メートルおき位に焼夷弾が突き刺さっていた。学友で、家族一家焼死した人、焼け出され田舎へ疎開した人、かなしいことが続く。京都の宮津に、父の従兄弟の家の離れを借り、疎開することになったので、空襲後、電線があちこち垂れ下がった焼け野が原を母、妹、弟と、大正区泉尾から大阪駅まで歩いた。

五月には私は学徒動員で香里の造兵廠(※⑥)へ。六月には兄が兵隊に。

七月、宮津の疎開先に直撃弾。家がすり鉢のようにになり、家族は近くの山の壕に行っていたので助かったが、叔母と従弟は爆死す。

※本文は原文に沿って忠実に記載しております。

にそなえて「学童疎開方針」を策定。国民学校の3〜6年生を都市から地方に分散させることにした。

※④類焼
よそから燃え移って焼けること。

※⑤茶箱
茶葉を詰めて貯え、輸送するのに使う大きな箱。湿気を防ぐため、内外和紙張りにして渋を引き、内側に錫を貼ったものであった。

※⑥造兵廠
旧陸海軍の兵器製造工場。